

カフェ国立公園 管理計画作成

実施地域

カフェ国立公園



1. プロジェクト要請の背景

ザンビアでもっとも古く広大な面積を持つカフェ国立公園では、一貫した管理計画とその実施体制が未整備であったため、密猟の増加や隣接地域の住民による森林伐採により固有の生態系が変化し、希少動物の減少・絶滅が心配されていた。1993年に制定された「ザンビア国立公園野生生物局5か年計画」でも、同公園の管理計画の作成は最優先課題とされた。

我が国は、1987年から青年海外協力隊員を同公園に派遣するとともに、1993年には野生動物調査のための専門家を1名派遣し、技術協力を実施してきた。

このような背景のもと、ザンビア政府は、地域住民との共生を考慮した公園管理計画を作成するため、我が国に個別専門家チーム派遣の実施を要請した。

2. プロジェクトの概要

(1) 協力期間

1996年4月15日～1999年4月14日

(2) 援助形態

個別専門家チーム派遣

(3) 相手側実施機関

観光省国立公園野生生物局

(4) 協力の内容

1) 上位目標

カフェ国立公園の管理・保全が改善する。

2) プロジェクト目標

カフェ国立公園の管理計画(案)を策定する。

3) 成果

a) カフェ国立公園内の植生、主要動物種の生態・分布調査を実施する。

b) 調査結果に基づいた公園管理計画(案)を検討

する。

c) 公園管理計画(案)について、ワークショップを開催する。

4) 投入

日本側

長期専門家 3名

短期専門家 10名

研修員受入 16名

機材供与 0.36億円

現地業務費 0.11億円

ザンビア側

カウンターパート

施設

ローカルコスト

3. 調査団構成

JICA ザンビア事務所

(現地コンサルタント：Mano Consultancy Services Ltd. に委託)

4. 調査団派遣期間(調査実施時期)

1999年1月25日～1999年3月19日

5. 評価結果

(1) 効率性

本プロジェクトでは、「チーム対チーム」の形式による技術移転が図られた。これは、通常の「1対1」の技術移転に比べ時間を要したものの、チームワーク意識が醸成され、活動の基礎が整えられたことにより、結果的には、国立公園の管理計画の策定における効率的な業務の実施に貢献した。

また、本プロジェクトで採用した、実際の公園管理計画作成の実務を通じてカウンターパートを訓練するという方法も、計画策定において実際に必要となる技術を適切に移転するのに非常に効果的であった。

(2) 目標達成度

カウンターパートは環境調査と国立公園計画策定に関する技術を習得し、カフェ国立公園管理計画の最終案を作成したことから、プロジェクト目標は達成されたといえる。この公園管理計画は、外国人専門家が作成した他の計画とは異なり、日本人専門家の支援のもと、ザンビア人スタッフが自らの手で作成したという点において、大きな意義をもつものである。

(3) 効果

公園管理計画が策定されたことは大きな一歩であり、今後この計画が実際に実施されれば、「カフェ国立公園の管理・保全の向上」という上位目標の達成が期待できる。

また、本プロジェクトを通じ、ザンビア側が自力で公園管理計画を策定する能力を備えたことから、今後、他の国立公園の管理計画についても独自に策定・改定していくことが期待される。

(4) 計画の妥当性

カフェ国立公園の管理・保全とそのための技術向上は、ザンビア政府の優先政策である。本プロジェクトの成果品である公園管理計画案は、財務面からの分析が不足していると思われるが、技術的におおむね適切なものであり、今後、同管理計画案を実施に移すことが望まれる。

(5) 自立発展性

公園管理計画に関するカウンターパートの十分な技術の習得と主体性の形成は、技術的な自立発展性の向上に大いに寄与している。一方、ザンビア政府の財政事情は厳しく、策定された公園管理計画をザンビア政府の資金のみで実行することは困難である。

6. 教訓・提言

(1) 教訓

公園管理を実施していくうえで、民間の観光業者や地域住民の協力が不可欠である。今後類似の計画を策定するプロジェクトにおいては、彼らと連携した効果的な公園管理を実施していくために、計画策定段階から、積極的に彼らの参加を図っていくことが重要である。



カウンターパートとともに植生生態調査をする成田専門家(植生生態)と新田専門家(野生生物管理)

(2) 提言

ザンビア政府の厳しい財政事情から、本プロジェクトで策定された公園管理計画(案)をザンビア政府が独自の力で実施していくことは極めて困難であり、同計画(案)を実施に移すためには、日本のみならず他のドナー国、NGO、観光産業、地域住民などからの協力を結集していくことが不可欠である。